



上原 弘美 先生

略歴

- 1981年 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科卒業
- 1981年 神戸市立中央市民勤務
- 2000年 神戸市立西市民病院勤務
- 2006年 神戸市立医療センター中央市民病院勤務
- 2008年 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科講師
- 2009年 日本福祉大学通信教育部医療・福祉マネジメント学科修了
- 2011年～ 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科准教授

- 2005年 (公社) 兵庫県歯科衛生士会副会長
- 2015年～ (公社) 兵庫県歯科衛生士会会長
- (公社) 日本歯科衛生士会 認定審査会委員
- 2016年～ (公社) 日本歯科衛生士会「歯科衛生士の人材確保・復職支援等に関する検討会」委員

高齢者の口腔衛生管理における現状 —口腔内環境維持の重要性—

神戸常盤大学短期大学部 口腔保健学科
上原 弘美

2016年9月、総務省から我が国の65歳以上の高齢者統計結果が公表され、その推計人口は3461万人、総人口に占める割合は27.3%と共に過去最高となっており、日本は世界的にも類を見ない超高齢社会を突き進んでいる状況にある。今後も高齢化のさらなる進展と人口減少という大きな人口構造の変化に伴い、保健医療のニーズは増加・多様化していくことが予想される。医科歯科を含めたエビデンスとして、高齢者の健康増進やQOLを高める上で、口腔の健康、すなわち現存歯数や咀嚼機能の維持が大きな貢献を果たすことが報告されてきている。昭和62年から6年ごとに実施されている歯科疾患実態調査の結果では、40歳以上の年齢階級において着実に現存歯数は増加している状況にあり大変喜ばしいことであるが、65歳以上においては歯肉炎、歯周炎罹患率ともに年次で増加している。さらに近年、摂食、嚥下障害によってもたらされる肺炎が注目されており、肺炎による死亡者の95%以上は65歳以上の高齢者と言われている。肺炎の発症は口腔ケアの実施により抑えられることが報告されて以来、口腔ケアは単なるう蝕や歯周病予防にとどまらず、感染症の制御としても期待されるようになってきている。

高齢者の口腔の特徴として、義歯装着やインプラントの埋入などにより口腔内が複雑化することや、身体機能の低下により口腔ケアの実施が難しくなる状況などが挙げられる。こうした口腔環境では、従来のハブラシや歯磨剤などを用いた一般的な口腔ケアの実施は必須でありながらも、さらに歯間ブラシ、シングルタフトブラシや舌ブラシなどの補助清掃具の活用も、自助での積極的なメンテナンスによる口腔衛生管理として重要である。しかしながら、補助清掃具の活用は個人の手技に大きく影響するため、我々はセルフメンテナンスができる高齢者においてどのようにすれば更なる口腔内の衛生管理が可能かを検討した。口腔内の細菌数は、通常歯磨き等のメンテナンスを実施した後、徐々に後戻りし、数時間の内にもとの水準に達する。つまり、食間における歯磨きだけでは十分でないことが想定される。加えて、衛生状態のコントロールは技術、時間、場所的な制限を受け、誰もが均一な衛生状態を得ることは非常に難しくなる。そこで我々は、高濃度の塩化セチルピリジニウムをスプレーという剤形に展開することで、人による使用差に加え、その他の背景による制限を受け難く、誰もが均一に細菌のレベルを抑制し、お口から健康状態をコントロールできる可能性を確認した。

本日は高齢者における口腔管理の実態に加え、現在まで分かっているエビデンス、実際に高齢者により確認した使用アンケート等について考察したい。